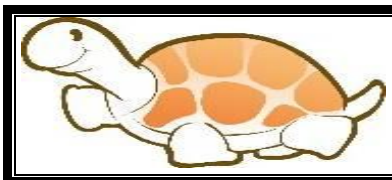

のこのこたより

令和8年2月　第130号

社社会福祉法人晃宝会
特別養護老人ホームあじさい園 宝
グループホームあじさい園 宝

住所：奈良市南肘塚町９９番１
電話：0742-24-0878　　fax：0742-23-0373

認知症疾患医療センター長の先生のコラムです。

『もの盗られ妄想の対象として、いつも「お嫁さん」が登場しますが、他にも対象になる人たちがたくさんいます。意外に多い対象となるのが、私たちの仲間である介護スタッフです。在宅ではホームヘルパーなどがその対象となります。時にはおとなりさんだったりします。少し深読みしすぎという方もおられるかもしれませんが、介護スタッフだと大抵しっかり者のスタッフが対象になったりします。お隣さんでもご自身よりよい身なりをして上品な方が対象になるような気がします。なぜでしょうか。

介護保険制度はその低下した能力に応じたサービスを提供する点でとても優れた制度だと言えますが、一面では「低下した能力に応じて」という点で残酷な制度ともいえます。できなくなったことを人にしてもらう、屈辱的な話ではないでしょうか。お年よりたちは、それを手際よくやってくれる人に対して「ありがとう」とか「ごめんなさい」という言葉しか出せなくなってしまいます。結局、役に立たないという自己の存在不安が呼びおこされ続けるのです。朝から晩まで「ありがとう」と「ごめんなさい」の中で生きてゆくのです。そこから生まれる情けなさ、それをそつなくこなす介護スタッフに対するうらやましく思う気もち、それが嫉妬心となり、あら探しから生まれるもの盗られ妄想、これらの連鎖を垣間見ることができなくもないのです。

ならば、私たち自身が先に、お年寄りに対して「ありがとう」という言葉を発することが、有効な介護手段として浮かびあがってきます。昔話をしてもらってありがとう、手伝ってもらってありがとう、ねぎらってもらってありがとう、心配してもらってありがとう、このくりかえしが、お年寄りの自己存在価値を、少しずつとりもどす、きっかけになると考えます。』

当法人でもこのような経験がありました。ヒントをいただいたような気がいたします。

クリスマス会開催！ご利用者様は、サンタさんに握手してもらったり、スタッフさん達と一緒に歌を唄ったり、楽しまれました。すいもんのパティシエさんのケーキやクリスマスメニューも美味しく召し上がっていただきました。

田代先生,藤本先生によりますクリスマスコンサート開催！

ご利用者様は、先生方のピアノやエレクトーンの音色に合わせてクリスマスソングを楽しまれ、大きな拍手で感謝の気持ちを伝えてくださいました。宝のホールは和やかな空気につつまれました。

2月の行事予定

3日：節分(昼食会)
9日：あじさいサロン　14:00
20日：お誕生日会　15:00

祝膳と干支饅頭を召し上がっていただき、新年のお祝いをしました。どれも美味しいと評判でした。

本末先生の健康体操開催！ご利用者は、寒い中楽しく参加されました。

スタッフと一緒に書初めに参加され、新年にふさわしいお言葉を書いてくださいました。

いつもご協力、ご支援ありがとうございます。
事前予約での面会を行っております。
お寒い中お越しいただきありがとうございます。

第 105 回　　歯みがきの歴史⑩

文明開化とともに歯ブラシ登場！人々の反応は

☆国産第 1 号の歯ブラシとは？

「鯨楊枝」という言葉からどんなモノが思い浮かびますか？

クジラの骨で作った爪楊枝ではありません。これこそ、国産第 1 号といわれている歯ブラシなのです。
江戸幕府の開国とともに、日本にも西洋の歯ブラシがもたらされました。輸入された歯ブラシは、銀製や骨の柄に、豚や馬の毛を植毛したもの。庶民にとっては高価なものでした。そこでさっそく、国産品の製造が始まりました。
1872（明治 5）年に、大阪の角細工商がつくり始めた「鯨楊枝」は、鯨ひげの柄に馬の毛を植毛したもので、インドから輸入された英国製の歯ブラシをまねたものでした。軽くて弾力性があり、プラスチックに似た素材である鯨ひげを柄に使ったところは、なかなかの着眼点。しかし、手本にした英国製歯ブラシは不完全なものだったとか。鯨楊枝は、大阪の小間物屋で販売されましたが、人気を呼んだという記録は見当たりません。
さて、「歯刷子」と書いて「はぶらし」と読みます。ただし、「歯刷子」という名前が使われ出すのは、明治末期のこと。人びとは、歯ブラシのことも、楊枝と呼んでいました。

☆根強かった房楊枝

竹枝歯刷子を使う女性を描いた「開花すごろく・早起き」（楊州周延）

じつは、文明開化後も、人びとは馴染みのある房楊枝を簡単には手放そうとはしませんでした。房楊枝は、1 回使うと捨ててしまう消耗品なので、簡単で使いやすく感じたのでしょう。それに、まだお歯黒の風習を続けている女性には、歯の手入れに欠かせない必需品でもありました。
ちなみに、明治維新後、お歯黒は古い因習だと考えられるようになり、1870（明治 3）年には成人する華族のお歯黒が禁止され、1873（明治 6）年には、明治天皇の皇后である昭憲皇太后が率先して、お歯黒を止めました。これを当時の新聞は「長年の伝統を打破」と伝えています。
ところが、その昭憲皇太后は、1914（大正 3）年に亡くなるまで、房楊枝を使い続けたました。動物の骨と毛でつくられた歯ブラシを「気持ちが悪い」と嫌ったのだそうです。「着物は女子の行動を制限して不自由である」と発言して積極的に洋服を着た皇太后ですら、歯ブラシは受け入れられなかったのですから、当時は、同じような感覚の人もいたことでしょう。
歯ブラシが本格的に普及するのは大正時代になってからのことでした。

あじさい園宝　歯科医師